



TITLE:

近世の人口について

AUTHOR(S):

本庄, 榮治郎

CITATION:

本庄, 榮治郎. 近世の人口について. 經濟論叢 1930, 31(3): 438-443

ISSUE DATE:

1930-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129927>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三號

第三十一卷

昭和五年九月一日發行

論 叢

法人配當源泉課税の長短……………法學博士 神戸 正雄

米國文化社會學……………文學博士 米田 庄太郎

貨幣の中心機能……………文學博士 高田 保馬

說 苑

世界商品價格の決定……………法學士 作田 莊一

京都市^{に於ける}米の小賣相場に就て……………經濟學士 谷口 吉彦

國家經費の轉嫁に就いて……………經濟學士 小山田 小七

雜 錄

近世の人口について……………經濟學博士 本庄 榮治郎

支那に於ける水利經濟……………經濟學士 大上 末廣

ソウエート露西亞の都市財政……………經濟學士 大谷 政敬

地券について……………經濟學士 黒羽 兵治郎

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

雜錄

近世の人口について

本庄榮治郎

徳川時代の人口については既に屢々之を論じたが、尙二三の地方的事例について、それを補説したいと思ふ。

徳川時代後半の人口が一般に靜止停滯の状態を呈したことは、既に一般に認めらるる處であるが、一國一地方の人口については、その事情必ずしも同様にあらず、人口の増加を見たる地方もあり減少せる處もあつた。その一例は既に述べた處であるが、¹⁾尙鳥羽氏の「江戸時代に於ける農村人口の増減の一二例」²⁾に示された處によれば、岡山縣和氣郡寒河村に於ては六八年間に二八九人の増加で一年平均四・二五の増加であり、福岡縣宗像郡池田村の例に於ては七三年間に六四人の増

第三十一卷 四三八 第三號 一三〇

加、一年平均〇・八七の増加であつて、兩者とも比較的良好なる自然的狀態の下に在りながら人口の増加率は極めて少なかつたことが明かである。地方的人口の長期に亘れる詳細なる記録は割合に少いやうであるが、「養老郡志」(岐阜縣)には各町村の人口が掲載されており、殊にその二三のものは長期に亘つて詳細なる計數が掲げられてゐる。それ等の數字について人口の増減其他を見るに次の如くである。

上多度村大字三郷字有尾(村高七四三石餘—元祿四年³⁾)

年號	戸數	男	女	計	年號	戸數	男	女	計
元祿四	三	七	七	一四	八	三	七	八	一四
享保六	三	九	八	一七	九	三	九	八	一五
天明四	三	七	八	一五	二〇	三	六	六	一四
七	三	六	九	一五	二	三	七	八	一五
八	三	九	六	一五	三	三	七	八	一五
寛政元	三	七	七	一四	享和元	三	七	九	一五
二	三	七	七	一四	二	三	七	七	一四
三	三	七	七	一四	文化元	三	七	七	一四
四	三	七	七	一四	二	三	七	七	一四
五	三	七	七	一四	三	三	七	七	一四
六	三	六	七	一三	五	三	六	七	一三

1) 拙著、日本社會經濟史、497頁
2) 歴史地理五三卷三號
3) 養老郡志、933—935頁

七	三	七	一	弘化元	三	六	六	三
一〇	三	五	七	三	三	六	五	三
三	三	六	七	嘉永元	三	七	九	二
文政元	三	六	六	三	三	七	五	七
三	三	七	六	五	三	七	三	五
五	元	七	六	安政元	三	七	三	五
七	三	七	七	三	三	七	五	一
九	三	七	七	五	七	六	六	二
天保元	三	七	七	萬延元	七	七	六	一
三	三	七	六	文久元	三	七	五	一
五	三	七	六	二	三	七	三	六
七	三	八	七	元治元	四	五	六	二
九	三	六	七	慶應元	三	六	九	一
二	三	七	六	三	三	六	七	一
三	三	七	五	明治元	三	八	九	一

雜錄 近世の人口について

五十人前後であり、戸數も大なる變化なく、安政以後やや増加してゐる。

同村大字三郷字田(村高九九七石餘—元祿七年)

年號	戸數	男	女	計	年號	戸數	男	女	計
貞享三	八	三	七	二九	延享三	三	一三	一三	二六
四	三	三	六	一四〇	四	三	三〇	二〇	五〇
元祿六	七	八	八	一六	寛延元	五	一七	二	一九
七	三	八	七	一七	三	三	二四	二	二六
一五	?	一六	二〇	二七	寶曆元	五	二二	二四	二六
寶永二	?	二〇	二六	二六	三	五	二二	二六	二九
五	?	二六	二八	二四	七	五	二四	二九	三三
七	?	二〇	二〇	二〇	九	五	二二	二五	三七
正徳四	?	二四	二〇	二四	三	五	二二	二九	三〇
享保六	?	二四	二八	二五〇	明和元	五	二二	二九	三〇
一三	?	二四	二九	二五	六	五	二二	二七	二九
一七	?	二四	二四	二六	八	五	二二	二七	二九
元文元	?	二四	二五	二五	安永二	五	二二	二七	二九
二	二	二五	二七	二七	五	五	二二	二七	二九
三	三	二五	二六	二六	七	五	二二	二七	二九
四	四	二五	二四	二四	天明元	五	二二	二七	二九
寛保元	三	二五	二八	二四	四	五	二二	二七	二九
三	三	二五	二六	二一	七	五	二二	二七	二九

第三十一卷 四三九 第三號 一三一

4) 同上、936—938頁

寛政元 八 九〇 一〇四 一九四 五 兎 二五 二七 二四三

七 兎 九七 一〇六 二〇三 九 兎 三〇 二九 二四九

一〇 兎 一〇六 一〇六 二二二 三 兎 二七 二六 二四五

享和元 五 一八 二二 三三 弘化元 五 二二 二七 三九

文化元 五 二二 二二 三五 四 兎 二七 二五 二六三

三 五 二五 二六 三一 嘉永元 五 二二 二二 二六四

七 五 二二 二五 二六 六 五 二四 二六 二八六

九 五 二二 二二 三三 安政二 五 二四 二五 二八九

一三 五 二二 二二 二七 萬延元 五 二四 二五 二八三

文政元 五 二二 二二 二五 文久元 五 二四 二七 二七一

四 五 二二 二二 二五 元治元 五 二四 二五 二八五

二 五 二二 二二 二五 慶應元 五 二四 二八 二八四

天保元 五 二二 二二 二五 明治元 五 二四 二六 二八八

此場合には貞享二年(一六八五年)より明治元年(一八六八年)まで百八十四年間に百四十九人の増加である。

然し享保六年以後の數字に徴すれば百四十八年間に十八人の増加に過ぎざるのみならず、増減常なきに

反し、貞享二年より正徳四年まで二十九年間に百十五人の増加であり、而もそれは増加一方の狀態に在る。

即ちこの場合に於ても徳川時代前半に於て人口増加の著しく後半に於て靜止の狀態となりしことは明かであ

らう。

同村大字三郷字横屋(村高五十一石餘—延寶六年)⁵⁾

年號 戸數 男 女 計 年號 戸數 男 女 計

元祿七 三 一五 二六 二七 一〇 五 一五 二二 二六

一五 三 一五 二五 二七 二 六 一五 二二 二九〇

一七 三 一五 二五 二七 天保八 五 二五 二五 二六六

天明二 三 一五 二五 二七 弘化四 五 二五 二五 二六六

八 三 一五 二五 二七 嘉永四 五 二五 二五 二六六

寛政二 五 二五 二五 二七 嘉永四 五 二五 二五 二六六

享和二 五 二五 二五 二七 安政五 五 二五 二五 二六六

文化六 五 二五 二五 二七 文久元 五 二五 二五 二六六

九 五 二五 二五 二七 文久元 五 二五 二五 二六六

文政六 五 二五 二五 二七 文久元 五 二五 二五 二六六

八 五 二五 二五 二七 文久元 五 二五 二五 二六六

右は元祿七年(一六九四年)より文久三年(一八六三年)に至るまで百七十年間に三十七人の減少を示して

る。此場合にも元祿年間の人口は増加の一方である。

天明以後は増減常なき如くであり、天明八年には元祿

以上の二九四人を算し、之と寛政十年とを比すれば百

人の減少である。其後人口増加し文政年間には元祿年

5) 同上、941—2頁

間の人口数と同様となり、天保以後大體減少の傾を示して居る。戸數の關係から見れば元祿時代は三十二三戸で二百八九十人の人口を有せしものが、其後は戸數は倍加して、人口は元祿時代と略同様若くはそれよりも著しく減少せる結果となつて居る。要するにこの場合は前二例に比して甚だ不規則である。

次に島根縣飯石郡の舊廣瀬藩に屬する部分の戸口調査を見るに、その結果は次の如くである。尤二歳以上のものにつき毎回その年五月に調査せるものである。⁶⁾

年號	人口	男	女	男百につき女	年號	人口	男	女	男百につき女
元文三	九六	四五六	四三三	八八	文化元	九〇六	四九五	四三三	八四
寶曆三	三八八	四四八	三六〇	八一	七	八七〇	四七九	四〇二	八六
明和五	八五七	四七九	三八八	八三	文政五	八九八	四六六	四三三	八一
安永三	八七七	四三三	三九五	八一	天保二	一〇六	四三三	三六五	八四
九	八七三	四七二	三九〇	八三	弘化三	八七六	四七二	三九九	八五
天明六	九三三	四八九	四三三	八七	嘉永五	九一九	四九七	四三三	八五
寛政九	九二四	四六八	四三三	八七	安政五	九四九	五〇六	四三三	八七
一〇	九二六	四七一	四三三	八八					

右の數字について見るに、寶曆十二年より寛政十年に至るまでは遞次増加してゐるが、それも三十七年間に

百〇二人の増加であつて、その増加率は甚だ低い。元文三年より安政五年までの百二十一年間の増加は二百九十一人であるから、此場合に於ても大體から見ても人口は靜止の状態にあるものといつて差支ない。右の人口數について特に注意すべきことは女子の男子に比して甚だ少きことであらう。

二

都市の人口については、其數字の明かなるものがあるが、都市人口構成の内容を詳細に知り得るものは必ずしも多からざるやうである。その點については「岡山市史」に記載されたる數字は甚だ興味がある。岡山の人口は、¹⁾

	人口	男	女
寛文七年三月	二八、六六九	一五、一一三	一三、五五六
同年八月	二八、四三二	一四、九〇七	一三、五二五
寶永四年六月	三〇、六三五	一五、七二七	一四、九〇八
享保二年	二七、九五〇	一四、一九〇	一三、七六〇

であつて、天保九年八月の宗門改には男女總數二〇、一七三を算し、享保以後減少の姿を示せるものと考へら

⁶⁾ 飯石郡誌、956頁以下
¹⁾ 岡山市史、465、470頁

れる。

寶永四年六月の調査には、その職業別を示し、召抱人口について在方之者他國者の區別をなして居ることは頗る興味ある處である。即ち左の如し。

職業別	男	女
商賣にて渡世仕候老若子供	四三九九人	三八一〇人
諸職人右同斷	二七七九	二五八一
日用ザルフリ右同斷	三九九九	三九七五
米仲買右同斷	二八	一九
旅籠屋右同斷	六六	六一
馬方右同斷	一三九	一三二
船頭加子獵師右同斷	二二八	一九四
作方にて右同斷	三四九	三七一
町惣代船惣代右同斷	一二	一
町代髪結床結共右同斷	二六〇	二二六
醫者針立	二二七	二一八
諸藝之師并に浪人	五八	四六
座頭并に盲目	七五	七七
道心者比丘尼	二〇	二九
梓神子	一	九
取上ばい	一	九
御家中長屋借	四五	五二

家子

一七 一八

奉公に罷出居申者之家内

二二九 五九九

奉公人

一四一二 一五六九

内御足輕并に小頭相夫共

内一八一

御中間御陸尺

八

御梶取御加子

二〇

御觸番御小人目付御勘定場

七

臺所下役閑谷番樋方鍛冶

四

御船手手代同心水門番人

三

大役

五三

丹波守殿内匠殿主膳殿に居申候

六二三 一一一八

御家中に居申候

二一 六

寺社方に居申候

七七 八三

在方に居申候

四〇三 三五〇

町方に居申候

一二

他所に居申候

一四、二九九 一三、九九九

合計 二八、二九八

外に召抱置候下人

一二二三 六九四

内御家中長屋より出る者

一三 三

在方より出る者

一〇七九 六六六

他國者

一三一 二五

町方に住宅仕居候得共

一六九 一八四

町構にては無御座候

三六 三一

右之者共召抱置候下人

一五、七二七 一四、九〇八

更に戸數についても次の如き變化がある。³⁾

年 月	戸 數	持 家	借 家
寛文七年三月	八、二〇〇	二、二一七	五、九八三
寶永四年六月	七、七三五	二、六六三	五、〇七二
寶 永 七 年	七、六九七	二、八四〇	四、八五七
享保五六年(?)	七、六九七	二、七六八	四、九二九
天保九年八月	七、八八五	六、二三〇	一、六五五

右の數字に對し「岡山市史」の著者は『家屋所有者漸次に増加して、天保九年には寛文七年に於けるものと殆ど其の數字をして正反對ならしむるに至れり。惟ふに其の原因たる多々あるべきも、家賃用場設置以來、家屋敷の價格低落したるを、其の重なる原因とすべし』と述べてゐる。然し右の數字のみにては享保以後の變化を知るに不十分であり、その理由の如きも再考を要するものの如くに考へられる。

3) 同上、471—2頁

1) 福田徳三博士『新刊書鳥瞰記』140頁(『改造』第二十卷第十一號所載)